

石原という「太陽」（田中秀雄『石原莞爾の時代』・『石原莞爾と小澤開作』）

ちやうど今、石原莞爾が里見岸雄に送った書簡の解説作業を進めてゐる。在家日蓮主義団体・国柱会を設立した田中智学の三男である里見は、マルクス主義的な社会科学に対抗し得る「国体科学」の樹立を目指し、『国体に対する疑惑』や『天皇とプロレタリア』などの大ベストセラーを残した。現在、里見に関する様々な史料（蔵書・書簡など）は彼が設立した日本国体学会に所蔵されてをり、評者が中心となつて昨年から本格的な整理を始めた。その一環として、機関誌『国体文化』に石原書簡の翻刻を連載してをり、解題を執筆するために関連資料を読み込んでいるが、石原といふ人物に対する興味は強まるばかりである。

そんな個人的な関心もあり、二冊合はせて五百頁を超えるが、あつと云ふ間に読み終はつてしまつた。そもそも、二冊に分かれてゐるのも叙述の都合に過ぎず、「石原を太陽系の中心に位置する太陽のようなものと見立て、その光線を浴びる惑星に焦点を当て」（『石原莞爾の時代』——以下、『時代』と略記）ようとする意図は一貫してゐる。

『時代』の目次を見ると、内田良平（黒龍会）、E・シュンペーター（イノヴェーション理論を提唱したJ・シュンペーターの妻で夫と同じく経済学者）、佐藤鉄太郎（海軍）、田中智学、市川房枝（婦人運動家）、マッカーサーと云つた当時を代表する人物が並び、本文を紐解いてみれば、（先述の里見を含めて）さらに多くの人々が登場する。また、姉妹編にあたる『石原莞爾と小澤開作』においても、満州青年連盟の指導者であつた小澤開作（小澤征爾氏の父）や山口重次を始め、満州や支那本土で活動した有名・無名の士に多くの筆が割かれてゐるが、最終的に石原といふ「太陽」へと収斂していくあたり、お見事としか云ひやうがない。

個人的には、田中智学や里見岸雄に関連する部分が示唆的だつた。とりわけ、満州事変に関して、「石原の持する日蓮主義思想からいうなら、これは満州軍閥に対する『折伏』であり、やむを得ず振り下ろした『降魔の利剣』であろう。彼は宗教上の師である田中智学から若い時代に『殺人剣を活人剣に変えよ』といわれたことがあるという。政治的、軍事的にいうなら、満州の治安の確立であり、そのための最小限必要なことをやっただけである。」（『時代』九十頁）と断じてゐるが、全くその通りであろう。

また、石原は「共存共栄」を「（満蒙——引用者補足）領有後の方針」と考へてゐたとの記述もあるが、これは里見の影響によるものではないか。里見は、先に述べた『天皇とプロレタリア』（昭和四年十一月）の中で、「刻々に変化しゆく高速度テンポの社会に、つねに清新なる人格的共存共栄の実をあげてゆく人格的創造の中に、仰いでつきず望んで涯しなき日本国体の真の栄光は輝くのだ」と述べてをり、石原が同書を読んだことも書簡から明らかである。

かうした思想的影響の延長線上に、日蓮の予言を前面に押し出した『最終戦争論』があることは云ふまでもない。石原の思想を把握するには、日蓮主義に対する正確な理解が不可欠である。

実を云ふと、本年一月二日の一般参賀に何人かで行つたり、去る七月三十日に中野で行はれた小生の講演（『「保守」に対する疑惑』）に足を運んで下さつたりと、評者と田中氏とは旧知の仲だ。いづれ、本書の続編的な位置づけで、石原と里見に関する共著を書き

たいと勝手に夢見てゐる。(かねこむねのり・姫路獨協大学法学部非常勤講師)